

〈研究ノート〉

## 伝服部南郭講述『唐詩選国字解』の 初版について

大庭卓也

江戸の書肆、嵩山房の三代目小林新兵衛祐之が出版した『唐詩選国字解』は、服部南郭による『唐詩選』の講義を林元圭という人が筆録したものと宣伝されている。嵩山房が享保九年以来、徂徠学派の勢力拡大の波に乗って手広く売りさばっていた和刻『唐詩選』の校訂者、南郭その人の解説書と言うのだから、この『国字解』は好評をもって世に迎えられたと見える。そのことは、天明二年の初版の後、寛政三年の再版、文化十年の三版、明治十五年の四版と、明治にいたるまで繰り返し本書が改版されているところからも端的にうかがい知られよう。しかし『国字解』を、南郭の講義を筆録したものと言うのは正確ではない。というのも今日の研究では、南郭の孫弟子にあたる清水江東に学んで、南郭の説をよく敷衍した宇野東山の著、『唐詩選諺解』(明和二年と明和四年の奥付を持つ二種の版あり。江戸潜龍堂庭川庄左衛門刊)と『唐詩国字弁』(明和三〇七年、京都文林軒田原勘兵衛刊)の二書に、嵩山房が手を加えて『国字解』をこしらえていたことが、様々な観点から明らかにされているからである。

ちなみに『国字解』は、明治の末から大正にかけて早稲田大学出版部から刊行された『漢籍国字解全書』全四十五巻の一冊にも収録されている。筆者も学生時分、この古めかしい活字本で様々な江戸人によ

る漢籍の国字訳に接したが、いま書棚から数冊を取り出してみると、かつてバラで買い集めていたために、背の書名を金文字で入れるものとインクで印刷するものが混在しており、『国字解』が収まる第十巻には昭和三年の発行とある。この頃まで装丁を変えながら重版されたのだろうか。して見れば、『国字解』の真偽が取り沙汰されてからさしたる時間は経ってはおらず、江戸時代から戦前に至るまで、本書は一般の読者には南郭の名とともに親しまれ続けていたとも言えそうである。

○

近代以降のことはさておくとして、ここでまず考えておきたいのは、本書の天明二年(一七八二)の初版から十年も時を隔てない寛政三年(一七九一)に板が改められた経緯である。いかにも早すぎるこの改版は、増刷による版木損傷のためではなく、初版の板が完成まもなく焼失してしまったための処置であつたらしい。寛政三年再版の折に追加された嵩山房の四代目小林新兵衛高英による「唐詩選国字解序」(寛政三年四月撰)は、先代の祐之が林元圭から南郭の講義録を託されて出版にこぎ着けたことから、版木の焼失、自身の代で版木を新調するまでの経緯をごく簡潔に述べている。

…先人、(元圭から『国字解』の原稿を)受けて焉こゝに蔵たくわめ、天明壬寅の歳(天明二年)、県官に請ひて梓行を許さるるを蒙る。因りて玄圭(元圭)氏の名づくる所の『国字解』を以て題と為し、刻既すでに成なれり。幾ばくも無くして罹災す。故に重ねて之を刻し、之を弘ひろむる所以なりと云ふ。(原、漢文)

こうした不慮の事故は当然、初版の印刷部数を著しく減らしたはずで、そのためか、天明二年初版の存在は長らく研究者の間でしつかりとは認識されていない。天明二年初版が、南郭以下服部家歴代の著述、草稿、旧蔵書類からなる早稲田大学の服部文庫のなかに存在することを最も早く報告されたのは、船津富彦氏「古文辞派の影響——近世日本の唐詩選ブームを追って（唐詩選版本考）」（『漢文教室』第七十六号、昭和四十一年、大修館書店。後に同氏著『明清文学論』平成五年、汲古書院に再録）であろうか。しかし、日野龍夫氏校注の東洋文庫版『唐詩選国字解』（昭和五十七年、平凡社）ではそれが踏まえられず、日野氏は、初版の現物が確認できない点、また割印帳にもその出版申請の記録が見えない点などから、初版の印刷と売り出しは実際には行われず、寛政三年の再版が実質的な初版であると推定され（同書「解説」）、寛政三年版を底本に採用しておられる。この数年後にまとめられた、山岸共氏著『江戸時代刊行唐詩選関係書提要——江戸時代と唐詩選——（補訂稿）』（昭和六十一年、私家版）では、所蔵先の明記はないもの、おそらく服部文庫本を指すと思われるような書き方で天明二年初版の存在が再び指摘されたのだが、村上哲見氏著『漢詩と日本人』（講談社選書メチエ33、平成六年、講談社）でも、やはり服部文庫の初版は視野に入れておられない（第四章『唐詩選』の話）。

かく研究者間で情報がうまく共有されない状況がうち続くなか、服部文庫の初版を真正面から取り上げ、その本文の特徴を詳しく検討した、有木大輔氏「早稲田大学図書館所蔵天明二年初版『唐詩選国字解』校勘記」（『中国文学論集』第三十八号、平成二十一年。後に同氏著『唐詩選版本研究』、平成二十五年、好文出版に再録）が発表されるにいたって、『国字解』初版が出版されていたことが、ようやく学界に周知されたと言えよう。思えば、服部家の資料群が早稲田大学へ寄贈され

たのは昭和二十年、その細目である『服部文庫目録』（早稲田大学図書館文庫目録第八輯）は昭和五十九年に公刊されている。おそらく船津氏、山岸氏のほかに、早くに天明二年初版を手にした人々は相応にあったかと想像するが、ひとつの書物が十分に認知されるまでには、これぐらいの時間を必要とするものなのであろう。

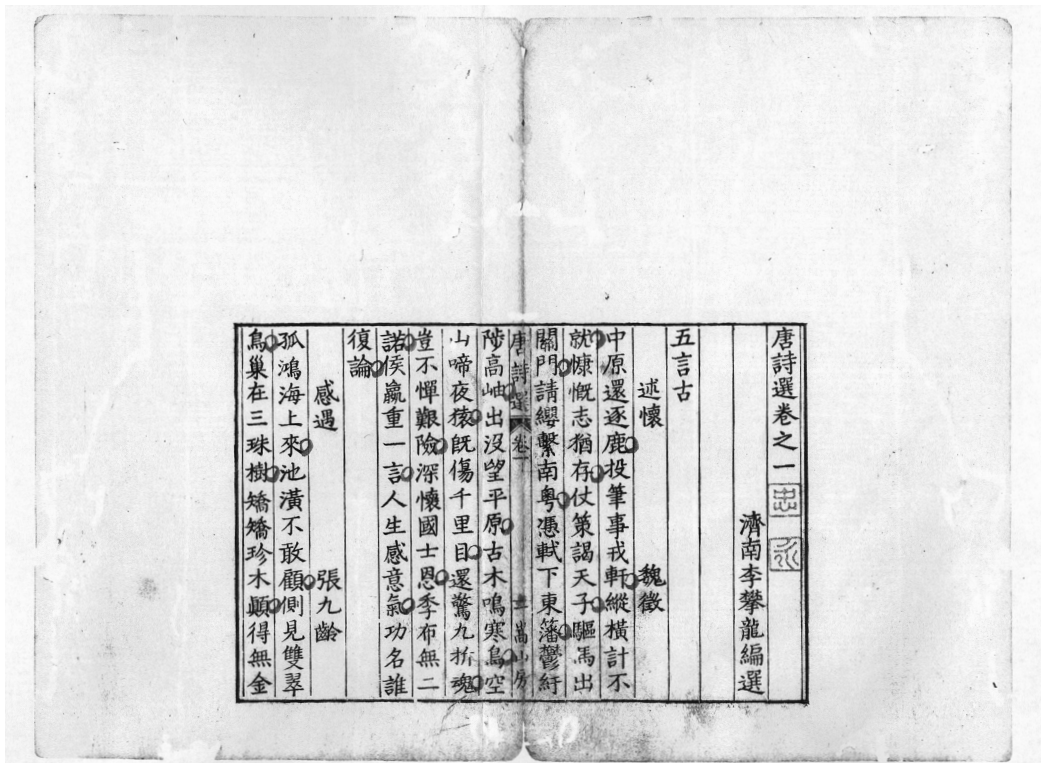
○

ともかくこれで、右に引用した嵩山房小林高英の言葉が、ある程度そのままにたどられるようになった。もうひとつ、服部家に初版の『国字解』が伝来することが意味するのは、本書の出版が服部家の了解のもとに行われていたという事実である。というのも、各地の図書館あるいは市場で見かける寛政三年再版以降の『国字解』は半紙本四冊の体裁なのだが、有木氏も注視されており、服部家伝来の初版の『国字解』は、天地とノドに余白を持たせながら美濃判紙に印刷した大本、四冊の体裁をとっている点<sup>2</sup>が、その間の事情を示唆しているからである。

現代でも、一つの書籍に、普及版とは別に印刷や装丁に意を凝らした、特装版あるいは豪華版、愛蔵版とか呼ぶもの売り出すことがあるが、ちょうど半紙本の『国字解』は普及版、服部文庫にある初版、すなわち大本の『国字解』は特装版に相当する。嵩山房がこうした特装版を、客の注文に応じてしばしば作っていたことは、拙編『江戸人、唐詩選に遊ぶ』久留米大学文学部創立二十五周年記念特別企画御井図書館貴重資料展図録、平成二十九年、久留米大学文学部）において指摘したところで、同書三十頁に掲載した参考図版5、南郭校訂『唐詩選』の一版式である無点本の特装版がそれである。この図録は、『唐詩

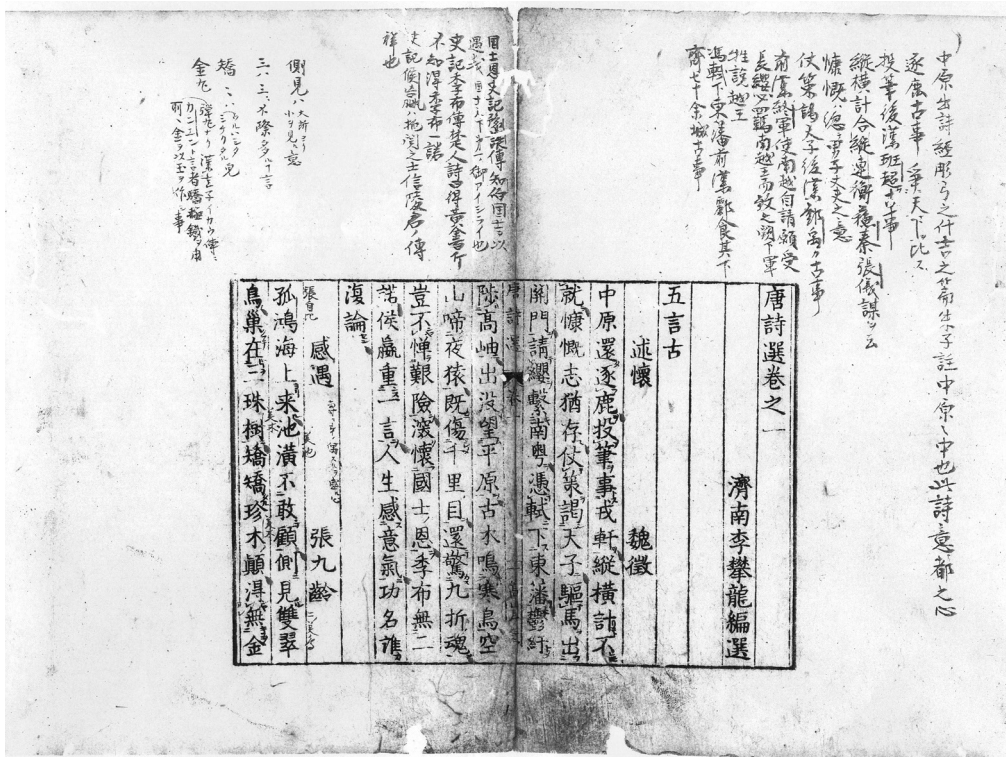
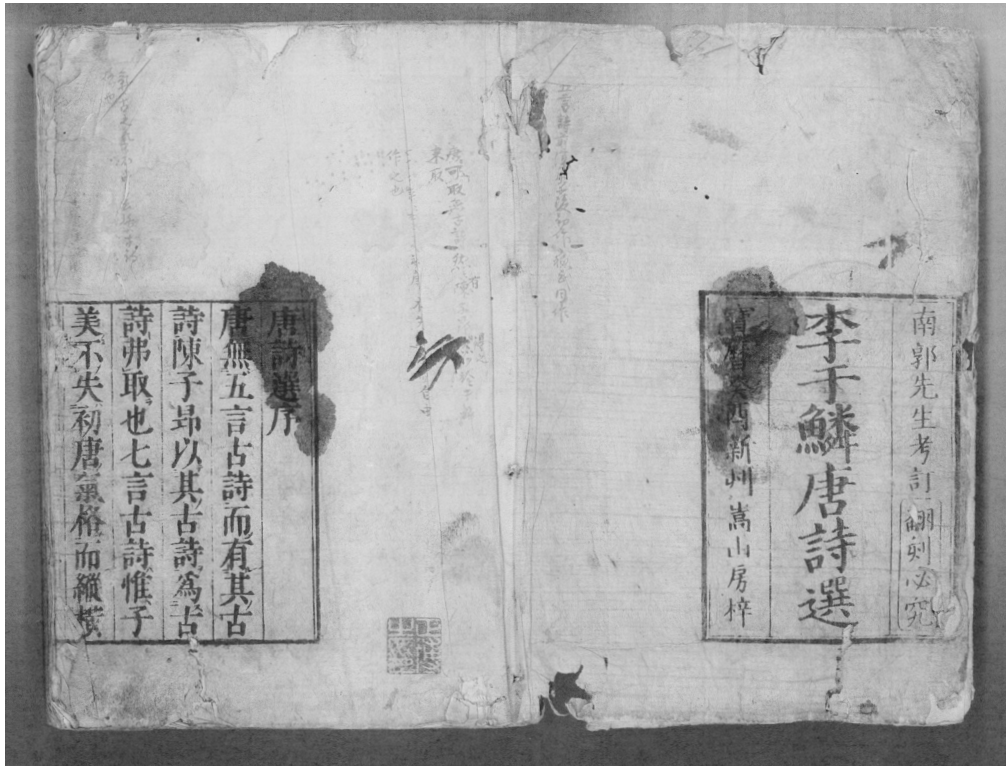


図一 南郭校訂『唐詩選』無点本特装版（寛保三年刊、半紙本七卷二冊）  
 \* 以下、図版に使用した書物は、すべて架蔵本による。





図二 南郭校訂『唐詩選』小字素読本特装版(宝曆三年刊、半紙本七卷一冊)



選」受容史研究のための図版資料集ともなればと、やや気負って関連資料の写真を網羅したつもりだったが、公刊後、これは是非とも掲載しておきたかったと思われるものが、一つ二つと現れてくる。南郭校訂『唐詩選』のもう一つの版式である小字素読本の特装版などもその一つで、報告済みの無点本特装版とともにここに掲出して、図録の補訂をさせていただく(図一・二参照)。両版式ともに、普通は小本体裁であるところを半紙本に作って、大きくできた余白には語注などのメモをふんだんに書き入れられる。これが特装たる所以である。

このほか、高山房の広告類に「唐詩選薄用(薄様)摺」などと商品として明記される、薄手の雁皮紙に印刷したのも特装版の一種と考えてよろしかろう。これは書型を大きくして豪華にするのではなく、楮紙に印刷した普通のものに比べて、唐本に近い光沢がある紙肌と、本の厚さが三分の一ほど薄くなるために特装と言う。また筆者の経験からしても、雁皮紙は楮紙よりも虫害を受けにくく、長年の保管によく耐えるように思われる。これなども特装の理由となろうか。所見の範囲では、この手のものは小本の小字素読本に限られているが、拙編の図録、三十頁、参考図版4として掲載させていただいた、久留米藩主有馬家旧蔵(久留米市立中央図書館蔵有馬家文書のうち)の享保九年版小字素読本の薄様刷りは、普通の小本(縦十四・五糎、横十糎前後)より心持ち大きな縦長の本(縦十六・五糎、横十・七糎)。大名家の注文を意識しての書型なのであろう。

かく高山房が作っていた特装版は様々だが、以上は言ってみれば商品としての特装版であり、服部家に伝来する天明二年初版『国字解』の特装版と同一視すべきものではない。服部文庫には、他にも半紙本の『唐詩品彙』(享保十八年刊、普通は小本体裁)や、大本の寛政四年版大字素読本『唐詩選』(普通は半紙本体裁、拙編図録三十一頁、参考

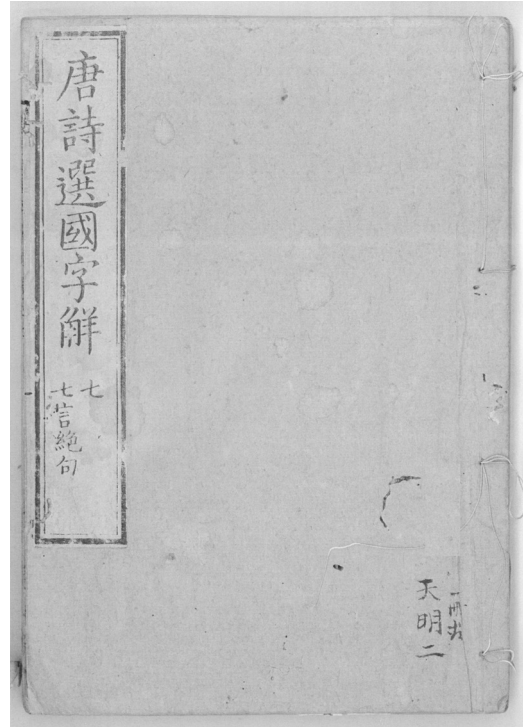
図版6)など、南郭が高山房から出版した校刊書の特装版で、普通より大きな書型に作ったものも揃って残されており、これらは高山房が南郭本人に、彼の没後には服部家に、出版の報告かたがた納入した、特別仕様のいわゆる贈呈本、献上本の類なのであろう。『国字解』初版の特装版もこうした例にほかならず、このことは、宇野東山の国字訳書が南郭の講述として出版しても差し支えない内容である点、言い換えれば、それだけ東山の『唐詩選諺解』や『唐詩国字弁』が南郭の説をよく継承している点を、服部家——天明二年頃の当主は三代目服部仲山(元文元年—文化五年)——が了解していたという証となる。日野龍夫氏は、同じく服部文庫に存する、南郭晩年の講義を筆録した『英渠館提耳』写本三冊中に書き留められる、王維の五言絶句「班婕妤」(『唐詩選』巻六)に関する説が、そのまま『国字解』にも見られる例を示し、『国字解』には南郭の講義に忠実な部分もあることを証明されたが(前掲日野氏校注東洋文庫版の「解説」)、服部仲山の了解を得ていたとなれば、そのほかの多くの部分においても、南郭の解釈、あるいはいかにも南郭らしい解釈が散りばめられていると考えてよいのであろう。

○

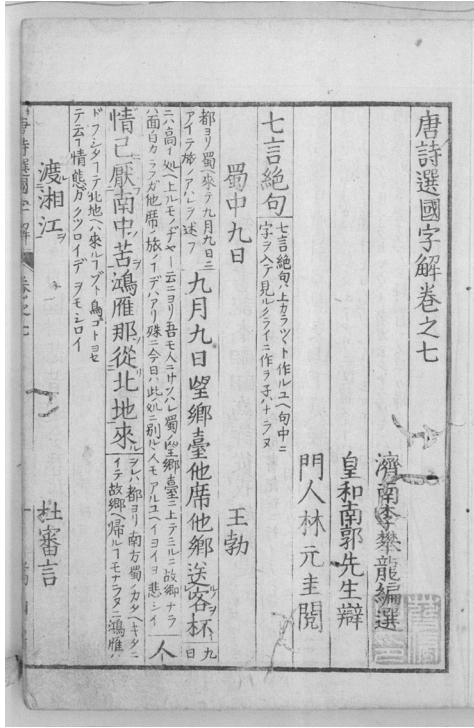
服部文庫に天明二年初版の『国字解』が存在する意義は以上のよう考えるとして、最後に指摘しておきたいのは、半紙本体裁の『国字解』初版についてである。初版を最も詳細に検討された有木氏は、『国字解』初版は服部文庫にあるこの特装の一本のみでほかに見出せないことから、初版は販売するには至らず、服部文庫の特装版は「先ず見本として服部家に寄贈された」もの、あるいは「出版前の校正版」で



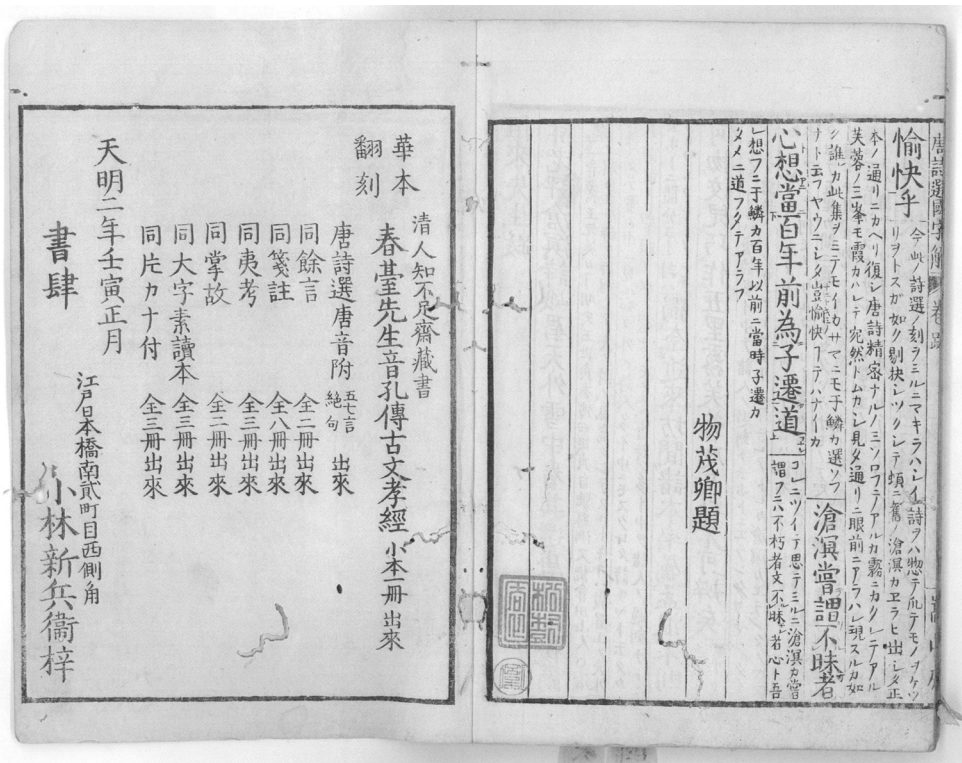
図三 天明二年初版『唐詩選國字解』甲本（半紙本一巻二冊存〈巻七〉）



表紙



卷頭



奥付





はないかと推測しておられる。筆者も先述の図録を編んだ際には、『国字解』初版の唯一の伝本として服部文庫の特装版の写真数葉を掲載させていただき(三十三頁、参考図版10-1-3)、版木彫刻が完成してもすぐ灰となり、日野龍夫氏以来、研究者からはその存在や売り広めを疑問視され続けるという、初版の不幸な境遇を思わずにはいられなかった。

筆者はかねがね、嵩山房の『唐詩選』関連書について、版木の磨滅がどのくらい進めば改版されるのかを考えるために、刷りの状態が違えば同じ本でも重ねて集め続けている。『国字解』も、諸版とりまぜてそれなりの数が手許にたまってきたが、図録の編集後、半紙本に製した初版の『国字解』を見出す機会が二度あった。両本ともに寸法は、縦二十二・五糎、横十五・八糎前後の普通の書型。すなわち初版は、服部家に特装版を納入してから版木が焼失するまでの間、わずかながらでも売り広められていたことが確認される。所見の二本のうち、(甲)は大尾となる巻七、七言絶句の講釈が収まる第四冊のみの端本(図三参照)。幸い、題簽も奥付も残る。内題下の編著者名の李攀龍、南郭、林元圭を三行分に記し、元圭の名の下に「閱」字を付けるのも初版の特徴で、寛政三年再版以降の重刻本は、みな二行分の幅に李攀龍の名を頭に出して、下に南郭と元圭を割り書きにし、元圭の名には「録」字を付ける。もう一方の(乙)は、巻一・二、五七言古詩の講釈を収める第一冊と、巻三・四、五言律詩と五言排律の講釈を収める第二冊の端本で(図四参照)、天明二年という刊年はどこにもないが、巻頭に寛政三年再版から加えられる嵩山房小林高英の序がなく、先述のような内題下編著者名の記載方式、また漢字片仮名による国字訳の部分が少ない間延びしたような、いかにも近世中期を思わせる大らかな字配りである点から、初版であると知られた。こちらは両冊とも題簽は失わ

れており、第一冊のみ辛うじて「唐詩選国」までの文字の部分だけが、うっすら表紙に剥げ残っている。

○

明治にいたるまで四版を重ねた『国字解』は、現在どこにでも転がっている本である。ぞんざいに扱われ不揃いになったものも多い。高英の序の有無や奥付など、一見して知られる要素を欠く場合には、たとえそれが初版であつても見逃されやすいであろう。筆者程度の心がけで二本も目に入るのならば、初版の『国字解』は全国にそれなりの数が残されていると見るべきで、あるいは早くに気付いている人もあるのかも知れない。以上の指摘も、やはり、書物が長い時間をかけて認知される一例であろうか。識者の御教示を乞う。

注

(1) 『唐詩選診解』三巻三冊については、宇野東山という著者名を記さない明和四年五月の奥付をもつ版のみが言及されてきたが、これより二年さかのぼる明和二年五月の奥付をもつ版も存している。奥付の記載は左のとおり。

東都 野友直<sup>てい</sup> 箸  
唐詩解選 半紙摺二冊  
同 小本 一冊  
同 薄用摺 一冊  
明和乙酉年五月 唐詩選診解  
江戸書肆潜龍堂 湯島天神下同朋町 庭川庄左衛門板行

既知の明和四年版『診解』と、後述する『唐詩国字弁』(明和三十七年刊)は、ともに著者名を伏せてあるために、従来、これらが宇野東山の著なのかどうかとよく議論されてきたが、この明和二年版『診解』の奥付には著者



名が明記される点が注視される。ただ、「野」は宇野の修姓と見るとしても、筆者は東山の名に「友直」があることを知らない。彼が出版した著述類をいくつか検してみても、みな「宇成之」と署名している。この「野友直」は若い頃に用いた名あるいは署名だろうか。また明和二年版『諺解』は、明和四年版『諺解』と本文は同版だが、内題と尾題に異同が認められ、明和二年版は内題、尾題ともおむね「唐詩諺解」に統一するのに対し（数ヶ所、題を欠くところあり）、明和四年版は三冊のうち第二冊のみ、内題は「唐詩選弁書」となり、尾題には収録の詩体名を当てている。不審に思われるのは、そうした尾題の一つ、

五言律詩弁書 終

- は、明和二年版では明らかに傍線を付した箇所を削って「終」の字だけ残しているように見え、刊行年時の前後と版木修正の順が合わない点である。右は顕著な例で、他にもそう思わせる例はいくつか見出せる。かれこれ考えると、明和二年という奥付を信頼してよいのかとさえ思われてくるが、いまは疑問のままを記し、『唐詩国字弁』との関係なども合わせて別稿を期したい。
- (2) 後述のとおり、服部文庫の天明二年初版の最大の特徴は大本体裁をとっていることだが、山岸氏は「○唐詩選国字解 七卷 天明2年初版 小林新兵衛 大4冊(再刻以後は半紙本)」と記しておられる。
- (3) 架蔵の享保九年版小字素読本、後述する久留米市立中央図書館の有馬家文書中にある、同じく享保九年版小字素読本。また真島望氏は、明和六年版小字素読本の薄様刷りを御所持の由、御教示下さった。